



Title	フラートキンのソビエト教育史研究から
Author(s)	村山, 士郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 80, 327-342
Issue Date	2000-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29623
Type	departmental bulletin paper
File Information	80_P327-342.pdf



フラートキンのソビエト教育史研究から

村 山 士 郎

第1部 人間フラートキン教授との交流 村 山 士 郎

フラートキン

フラートキンは、1933年生まれ、モスクワから汽車で2時間ほどの古都ウラジーミル市の教育大学の教授であった。アカデミーのロシア・ソビエトの教育史の分野では、ペレストロイカの歴史の見直しの中、スターリン時代の教育学への凶暴な弾圧を告発すると共に、20-30年代の中心的教育家・教育研究者の人間の苦悩を解明しようとしていた。その意味では、社会主義そのものを否定しない歴史総括を93年まで続けていた数少ない教育史研究者であった。彼は、ようやく、ロシアの教育史研究で中心的役割を期待されていた93年突然亡くなった。

私の手元にフラートキンから受け取った次のような手稿が残っている。

- * 「クルプスカヤの神話」(今回訳出)
- * 「社会化する要因のシステムにおける学校の変動する位置」(A4タイプ打ち 12枚)
- * 「我が国の歴史文脈における社会化の諸課題」(M. Γ. プローホヴァとの共同 13枚)
- * 「ソビエトの研究者 C. T. シャッツキーの人生の悲劇的謎」(19枚)
- * 「シャッツキーの最後の年月」(28枚)
- * 「妥協の値段、または、ほんとうはなかった対話」(6枚)
- * 「フラートキンとの対話 —1992年9月10日のテープおこし—」(28)

手稿は、私との交流の中で、日本での「ソビエト・ロシアの教育史」に関する出版を計画し、その原稿の一部として私に選考を委託したものであった。残念なことに、その計画は、彼の死去によって実現できなかった。今回、訳出した「クルプスカヤの神話」は、完成度の高い論文おひとつである。

本来ならば、フラートキンの教育史研究の課題と方法意識に関して解説を書かなければいけないところである。しかし、そのことは簡単ではない。まず、ペレストロイカ以前に発表された彼の論文や著作は、彼にとっての必ずしも自己の考えを自由に表現しているとは見なせない。ペレストロイカ以降でも、彼が公表した論文や大学での講義ですら、自己の本心を明かしたものとは言えない。彼は、いつも、再び、共産党政権が復活することを考慮して発言していた。従って、発表を前提に書いていた未発表論文も同じような性質を持っていると見なければならぬだろう。私が伝えられるのは、解説としては、邪道だが、彼との私的交流を書くことによって、彼の人物と研究を伝えることができると考える。

フラートキンとの私的交流

フラートキンとはじめてお会いしたのは、1991年の冬であった。彼の友人であり、ペレストロイカの過程で革新派教育学者として頭角を表し、ロシア・オープン・ユニヴァーシティを設

立し、その学長として活躍していたボリス・ミハイロヴィッチ・ビム＝バードの自宅であった。ボリスは、私がソビエト・ロシアの学校史に研究関心を持っていることを知り、彼の信頼できる研究者を紹介するという約束を果たしたのであった。

彼との本格的交流は、1年後の92年9月にはじまる。その時のフラートキンとの交流を私は、次のように書いている。

1992年9月18日（金）

朝からウラジーミル市に行く。モスクワから電車で3時間余りで、ロシアの古い都である。先日、ビム・バードさん宅でクルプスカヤの死についてうかがったが、その研究を長年しているフラートキン教授を訪ねるためだ。前に一度紹介されているので電話で連絡を取り、時間を取ってもらう。

クールスキー駅から三人掛けの木の椅子に座って3時間30分ほど、車内は満員で立っている人もいる。郊外の別荘に行く人達、大きな荷物を持った人達、新聞を売りに来る青年、アイスクリームを売りに来るおばさんと車内はにぎやかだ。向こうの方では、怒鳴りあいが始まる。みんな、また始まったかという顔で溜息をつく。昔のまんまである。

フラートキン教授は、ホームで待っていてくれた。ウラジーミルの教育大学に行き、副学長に挨拶し、教授の大学院生の案内で食堂に行くがしまっている。学生がコルホーズのじゃがいも掘りの手伝いにいっているため、大学は月末にならないと始められないらしい。そんなこともあり大学の食堂はしまったままだが、学食が高くて学生が食べなくなってしまったらしい。

大学院生たちとの日本の教育についての懇談を一時間ほどやり、街の見学に行く。院生の一人スペータさんが案内役だ。街に出て感じたことだが、モスクワと違い、ひとびとがまだゆっくり生活している感じだ。街角に物売りの姿はないし、店に入ってみても、正規の値段で物を売っている。デパートに入ってみたが、衣類、日曜雑貨、靴、電気製品、学用品、などがロシアの店にしてはかなりそろっている。値段も高くはなったが、モスクワからみればかなり安い感じがする。お土産物を二三買って見たが、確かに安い。

スペータさんは、モスクワは、もうすっかり変わりました、外貨を持っていない普通の人は住みにくい街になってしまいました、街はよごれ、街全体が闇市のようになってしまいました、と語る。

ウラジーミルのウスペンスキー寺院は、キエフ・ルーシのあとの首都であったなごりをとどめる。

夜に、フラートキン教授の家に行く。息子さんは、モスクワの大学にいらっているので、彼のお母さんと奥さんの3人暮らしだ。ささやかな手料理でもてなされ、日本のことやロシアのことに花がさく。奥さんは教師なので、昨日のストライキ委員会のことを話すと、「そう、闘わなくてはどうにもならないのよ。みんな苦しんだから」と笑う。

夜、テープを回しながら、フラートキン教授の話を聞く。20年代と30年代の教育史の興味のある話だった。クルプスカヤは、20年代に自分が指導して作り上げた学校を30年代に本当に守ろうとしたのか。31年「決定」がコンプレックス・プログラムを否定していたのに、なぜ、クルプスカヤは、その「決定」を支持したのだろうか。かつて、私も、ある論文に書いたことのある問題である。彼女は、多くの党の指導者が殺されていったことを知らなかったのだろうか。知っていたら、なぜ、そのことを批判しなかったのだろうか。彼女の二面性がどこからきてい

るのか、そのことを証明しなければならない。そういうことを、資料で証明することはむずかしい。そこに今日の研究課題があり、従来の方法では解決できない。ソビエト教育学の多くの問題が同じような課題に直面している。

彼は、また、かつてから、クルプスカヤの死に疑問を持っており、探ってきたという。彼は、かなり前から、クルプスカヤと一緒に仕事をしていた人であって、証言を取ってきた。残念ながら、当時は、まだ、テープに取ることは危険であった。彼女は、晩年、全く隔離された状態で生活していた。彼女には、当局から回された人がいつもはり付いていた。ある信頼していた女性によれば亡くなる前日は、クルプスカヤは元気であった。夜に、おなかがいいたいと苦しみだし、朝には亡くなってしまった。クルプスカヤはスターリンによって殺された、これがフラートキン教授の説である。

11時を周り、大学の宿舎まで私を送りながらまだ話は続く。彼は、マカレンコの著作集の編集にも加わったが、その時のマカレンコのどんなところを削除したかなどのエピソードを語りながら、政治的にマカレンコのつくられた部分があることを話してくれた。

「スターリンは、なぜ、クルプスカヤを殺したか」「マカレンコの真実と嘘」このふたつのテーマで共著を書こうということで意気投合し、来年の再会を約束する。

村山は、歴史への関心は旺盛だが、具体的に課題を設定し、仮説を持っていない、それでは資料を探ることができない、と私への助言も始める。これで、もし来年モスクワにきても、指導してもらうに値する有力な研究者に出会ったという印象だ。

宿舎のおばさんをたたきおこして、ドアをあけてもらう。部屋に入ってベッドにつくが、なかなか眠られない。こんな興奮はしばらくなかった。

19日、9月下旬にしてはめずらしく良く晴れた。教授は仕事で忙しく、昨日食堂に案内してくれた院生のスベータさんの案内で古い寺院を集めた観光の町、スーズダリに行く。30分ほどタクシーでいくのだが、地平線まで牧草地がつづく。遠くにトラクターが見える。この豊かな大地を持つロシアは、なぜかくも貧しいのか。

『ロシア見たまま、感じたまま』恵邦・訪口研究会

1993年1月

この時、話したクルプスカヤのことは、「クルプスカヤの神話」には入っていない部分がある。彼は、クルプスカヤの死に関して「毒殺説」を裏付ける調査聞き取りを丹念に行っていた。また、彼自身も参加したマカレンコ全集を編集する際、いくつかの重要な部分の削除をおこなったことも語っていた。

私に93年4月から94年3月までのモスクワでの長期海外研究を決心させたひとつの要因は、このフラートキン教授との出会いであった。彼は、ウラジーミル市の教育大学の教育史の教授の職にあったため、私のアカデミーの研究所での直接の指導教員はブローホヴァ教授におねがいがしたが、実質的な指導教授はフラートキンであった。93年から94年の一年間のモスクワ滞在の私の研究と生活については、『迷走国家の研究者村でーモスクワ日記通信ー』（私家版小冊子127頁）で紹介したが、その中から、フラートキンとの交流をいくつか紹介してみたい。

かれは、モスクワの教師再教育研究所（全国の教育大学から若手教員が長期休暇をもらって研究学習にきている研修所）で授業をもっていたので、私もその授業に加えてもらった。

フラートキンとは、いろんな論議をしたが、その一つに、ソビエト・ロシアの教育史の新し

い研究論文をいくつか集めて日本で翻訳紹介する計画であった。

教育アカデミーの保守派・改革派

1993年5月15日、ウラジーミル市から久々にモスクワに出て来たフラートキン教授にあう。彼と3時間ほど一緒につくる論文集について計画をねる。彼のソビエト教育史におけるクルプスカヤ論は、じつに興味深い。「クルプスカヤの神話」という草稿をいただく。いろんな本の構想をまじえて、テーマだけでなく、今、ロシアで誰がおもしろい論文を書けるのか、という観点からいろんな教育研究者の動向も話してもらって興味深い。二人で、「これだと3冊くらいの本を編集しないと計画が実現できないね」と語り合う。今日は、第一読解にして、次回にもう少し絞って話し合うことにする。

17日、ロシア教育アカデミーで重要な研究会議があるというのでフラートキン氏と参加する。テーマは、「現代ロシアにおける人格教育（ヴァスピターニエ）の目的について」である。かれの情報によると、教育アカデミーの第一線の研究者たちによる重要な会議になるはずだという。報告は、ボリス・チモヘーエヴィッチ・リハチョーフである。かれは、アカデミーの中で保守派の代表的存在である。最近、500ページをこえる「教育学」の教科書を出版して、そのなかでも、ベレストロイカ派の改革案を作った「ヴニーク」を批判している。

93年9月1日

私は、フェンリク・アローノヴィッチ・フラートキン教授の教育史の集中講義が、あるというので全国の学校の教師や大学の教師の専門性を向上させる研究所にでかけた。長い休みをとったあとなので生活の切り替えのためにも、2時間の講義は楽しく聞けた。終わって、一緒につくる論文集の打ち合わせをする。

H. K. クルプスカヤ研究者のアンナ・イズマイロブナさんに紹介される。H. K. クルプスカヤの資料を丹念に読んできた研究者で、彼女の教育活動というよりは、彼女の人生における心理的側面に興味があると話していた。このところ、H. K. クルプスカヤの政治活動に関する資料がではじめたが興味があるか話していた。私の方からは、H. K. クルプスカヤの新しい資料を一冊の本にまとめて日本で発行する計画とフラートキン教授と企画している論文集に論文を寄せてほしいことをお願いする。論文は、こちらで発表できないでいる「だれがスホムリンスキーを殺したか」（「殺した」というのは殺人という意味ではなく、心理的に圧殺したという意味）というショッキングな論文を提供してくれることになった。彼を圧殺した人物はいまだにアカデミーの中枢にいて、今ではスホムリンスキーの宣伝をしている、と笑っていた。近日中にコピーをもらう約束をする。

この時点で、今回翻訳した「クルプスカヤの神話」の草稿をいただいたことがわかる。この論文集の企画は、その後も続き、彼の推薦する何人かの研究者も紹介してもらった。その一人がアンナ・イズマイロブナである。彼女は、スホムリンスキーを心理的に圧殺されたという仮説を実証しようとしていた。フラートキンとの交流はその後も、坂元忠芳氏の訪問などもあり、楽しく順調に進む。彼は、秋に、西ドイツにいて研究交流をおこなっている。

ところが、彼の死は突然やってきた。

フラートキン氏の突然の死

1993年12月27日夕方、突然悲しい知らせが入る。研究所から帰ったベーラが、フラートキン教授が亡くなったことを知らせてくれた。あまりに突然である。朝、ビン・バードさん（最も親しい友人の一人）と電話で話したときには何も言っていなかった。研究所でその知らせを聞いたマルガリータ教授は、そのまま気持ちが悪くなり救急車で運ばれたという。

私のこの通信の15日に書いているように、寮のフロアーで選挙の結果やこれからの研究について意見を交わしたばかりであった。その時いただいた新著『シャツキーの教育システム』についても、批判的なコメントを準備して、年が明けたら意見交換をする約束であった。ソビエト時代の新しい教育史研究を日本に紹介する論文集の編集も彼と一緒に準備しているところであった。ドイツから帰り一度入院したが、回復して講義も始めていた。一週間ほど前に、心臓の発作で再入院したと聞いていたが、二週間ほどで退院できるとウラジーミル大学の彼の院生から聞いたばかりであった。

91年にお会いしてから、92年には、彼の家でこれからの研究についてたくさんのことを夜中まで話したこと、93年からの留学にも全面的な協力体制をつくっていただいたこと、今年の夏休み前に、突然、寮の私の部屋を十時過ぎに訪ねてきて、夜中まで話したこと、が思い出される。

今年の秋には、坂元忠芳さんとウラジーミル市の彼の大学を訪ね、夜には、彼の家で彼がとってきたという茸を奥さんの手料理でご馳走になりながら、ソビエト教育学の歴史的評価について、坂元先生はフラートキンさんがバーフチン研究をすすめていることを聞き、意気投合し楽しい一夜をすごしたことが思い起こされる。彼の講義で、新しい学校イメージを構想するとき、シャツキーを高く評価することと現代のダビドフの発達の学習論を同一線上で評価するのはまちがいでないか、と質問し出席していた院生や教授達と楽しい対話をしたこと（12月にあったときに彼はまだそのことにこだわり、村山のダビドフ評価は一面的だと言っていた。）、十月の事件の時には、十月広場まで歩きながら論争をしたこと（「通信」No.6, p.14-15 参照）などがなつかしい。

12月に60才を迎えたばかりだから、これからロシアの教育史研究の中心的存在としての活躍が期待されていた。私個人にとってはもちろんのこと、ロシアの教育学研究にとっても大きな痛手であろう。

あまりの突然で、その日の宿舎では彼を知っている院生や教員たちが集まり、パニック的状况であった。

1年間の海外研修を終えるにあたって、私がフラートキンに関して書き留めたものを最後に紹介しておきたい。

1994年3月12日に急に亡くなられたフラートキン教授は、私の今回の留学の研究上の指導・相談を受けてくれていた人だけにほんとうに残念である。彼自身がいちばん残念だったに違いない。60才だった。これからたくさんの仕事を計画していた。日本にもきっと招待できたにちがいない。三年前にビム・バードの家で知り合った。その時は、20年から30年代の私のソビエト学校史のとらえかたにたいへん興味をもってくれた。一昨年は、ウラジーミルの自宅を訪ね、ひと晩じっくりと話し込んだこともあった。プラジーミル教育大学に日本の先生たちの教育実践を学び交流するセンターをつくろうと計画したのも彼とであった。冬になったらロシアの農民のイズバ（小屋）につれて行ってあげると約束していた。そこで住んで、ロシアの農村の学

校をいくつかまわろうと招待してくれていた。それを見ないでは、ロシアはわからないというのが彼の持論であった。その点で、モスクワにいる学者とはひと味もふた味もちがっていた。

彼とは、ソビエトの 20 年代評価で意見が違い、論争中だった。シャツキー評価でも、20 年代後半の彼の変化をスターリン主義の犠牲とみる彼と、それもあるが、彼自身の主体的変質とみる私とは、かなり大きなちがいがあった。

フラートキンとは、もっともっとたくさんのことを論議し、いろんな企画を実行したかった。歴史論集の編集、日本の先生たちとの実践交流センターの設置、ロシアの農村地帯の学校への訪問旅行、などなど、は宙に浮いてしまった。フラートキンが若いときにアカデミーのなかでやられたマカレンコ著作集の修正（改作）問題もぜひとも光を当てて欲しかった。しかし、もっとも残念だったのは、フラートキン自身であったろう。遅ればせながら、ようやく、彼の論文を日本で紹介できた。彼から受けた援助と友情へのささやかな返礼としたい。

第2部 クルプスカヤの神話 (МИФ О КРУПСКОЙ)

フリックス・アローノヴィッチ・フラートキン (Ф. А. ФРАДКИН)

クルプスカヤとスターリン

1930年代、とりわけ30年代の後半に、H. K. クルプスカヤの飾りたてられた人物像が大量の報道手段を用いて積極的に作り上げられていった。

この時期、教育学文献を読むと、クルプスカヤは、なごやかで平穩であった印象が残る。あたかも、何百万人の人々の悲劇が起こらず、また、教育人民委員 A. C. ブーブノフをはじめ教育人民委員部の数百人の勤務員が逮捕され、ルビヤンカ(モスクワ市内の地名、ソビエト KGB〈秘密警察〉の本部があった一沢者)の地下室に消えていったことがなかったかのようである。クルプスカヤは、青年に立身出世、小市民根性、そして官僚主義を教育し、共産主義的警戒心を弱めようとする人民の敵との闘争を要求する偉大なスターリンの信頼できる友人であり、戦友であり、かれの教え子と同じ目的を持つ集団のひとりである、ことが強調されていた。「彼女は、自分の道、すなわち偉大な人民の頭領・同志スターリンの指導のもとにボシシェビキの道を継続した。」(『ソビエト教育学』1939年 P.18)

もっとも重視して提起され、詳細に設計された彼女の人物像は、「共産党のもっとも古い党员」「ピオネールとアクチャブリャータ(十月の子という意味で7-9歳までの子ども組織一沢者)の友」である。それに比べ、少し不満ではあるがソビエトの子どもたちが大好きであったのは、共産主義の理想への子どもたちの忠誠に心をくだしているクルプスカヤおばさん像である。彼女の死後、『ソビエト教育学』に発表された最後の論文は「レーニン主義者・スターリン主義者の教育について」と題されていた。そして、それは、クルプスカヤの遺言状だと偽られたのである。

クルプスカヤが十月革命におけるスターリンの役割についての虚偽の洪水とソビエト教育学と学校への指揮官の決定的貢献に注目することの過度の強調に大変堪え忍んだことは疑いのないことである。彼女は、ときおり、自分の苛立ちを抑えることができなかった。そのような時にしたであろう批評の手稿の余白に怒りにみちた書き込みメモをみることができる。「スターリンの学説は労働一般についてはまったくなく、社会主義建設の条件についてだけである。社会主義建設における大衆の役割については、まったくない」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 121, л. 1) それらは注意深く、ていねいに集められ古文書保管施設に送られたが、彼女の同時代者たちにもこれらの書き込みは知られていない。

クルプスカヤのもとにたくさんの人々が、真実をもとめ、身近な人々を収容所、牢獄、銃殺から救済する願いを持ってやってきた。彼女は、彼らを援助する力のないことを感じていた。П. В. ルードネフは、1937年6月、自分の逮捕とそこで17年間収容されることになる矯正労働キャンプ管理総局への出頭の前日のクルプスカヤを次のように思い起こしている。

「彼女は、窓際の机のそばに座っていた。そして、自分の流刑のことを思い出していた。私は、彼女は自己の人生においてなんと多くの無駄、苦難、嵐を耐えてきたことか、身体的にはかくも弱いになんと勇気があり強靱な人間なのかと思った。西に傾いた太陽の光がナデジダ・コンスタンチノーヴナの容姿と顔を照らしだしていた。彼女は悲しそうに優しく微笑んでいた。

その微笑はいつもなんとあたたかくそして人々への愛に満ちていた。」(『ナデジダ・クルプスカヤについて』モスクワ、1988年、P.118)

この時期に理想の教育者として宣伝されたクルプスカヤ像は、「天才的教師、そして、ソビエトの子どもの友」、「勤労者の自由と幸福のための英雄的闘争において、また、祖国と全人類のための偉大な労働において最も深い知識で武装した人」である。スターリンは、全世界の栄光の頂上に立っていた。学問の光を掲げる者、最も偉大な国家の活動家、元帥、彼は、歴史的に不滅の輝きに照らし出された時代に立っていた。国民教育分野のわが国の論文の中にもスターリンの例を記憶するようになる。スターリン時代にふさわしく若い世代を教育するようになる。(ロシア共和国教育科学アカデミー総裁 B. П. ポチョムキン の演説より。引用は、H. A. コンスタンチノフ、E. H. メディンスキー『ロシア共和国 30 年ソビエト学校の歴史概説』モスクワ、1948年、P.481)

科学的証明は、論拠を必要としなくなった。科学的証明のかわりに、「天才」から、『レーニン主義の諸問題』11 版から、『ロシア共産党(ボ)史』から、『ブラウダ』の論説からの引用がなされるようになった。「左翼の偏向」「自由教育の同調者」「学校死滅論の擁護者」「ブルジョア教育学の影響の普及者」といったタイプのレッテルが教育学論文の決まり文句になっていった。彼らは、人々の意志を無力化し、奴隷根性の構えを育て、教育学者を恐怖と従順さで支配したのである。

30 年代後半に書かれた H. K. クルプスカヤ の資料を調べると、この時期に書かれたものは、詳細な自己検閲がなされており、同時代者は、日記的メモが存在していることを証言しているが、日記的メモなど個人的な感想を実質的に記録に残さないようにしていたという印象が残る。彼女の資料の中で私にまったく特別な強烈な印象を呼び起こすひとつの文書がある。それは、1923 年にヴラジミール・イリイチといっしょに彼の演説を復元する仕事をした時の彼女の日記である。「私はその日記を読みながら、心ゆくまで涙した」と П. B. ルードネフは書いている。(『ナデジダ・クルプスカヤについて』モスクワ、1988年、P.117)

例外的なものだが古文書の中から私たちによって見つけだされたまだ一度も公表されていない、人間のエモーション(情緒)について書かれたテキストがある。そこで分析されている特別のテーマは人間の憎しみである。その例に挙げているのがスターリンの行動様式である。

「憎しみ—それは感情である。あるいは書物の言葉でいえばエモーションである。心理学は、人間の行動様式におけるエモーションや感情のあらゆる意味を解明し、科学的に基礎づけている。エモーションは、人間的発達のもっともすばらしい原動力である。それは、人間の経験から幾世紀にもわたって明らかにされてきたことの科学的根拠によって導かれたものである。感情の力、その情熱は、人間の生活において決定的なものである。もちろん、この人間にとって基礎的であることと多様な感情の現れの高次な形態とを混同してはならない。たいへん情熱的な人間は、しばしば自分に熱中するあまり、反面他の人たちがどんな感情を持っているのか気づかないことさえある。同志スターリンは、人々を気晴らしに牢獄で殺戮している同じ時間に、本を読むことができた。憎しみの感情の影響によって最も嫌悪すべき罪をも偉大な功績をも成し遂げることができるのである。それはすべて何を憎み、だれを憎むかによってである。明確な目的性を持った憎しみ、それが実をいえば問題なのである。情熱は明瞭な思想、その正しい方向性と結びつかなければならない。」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 121, л. I)

これが、H. K. クルプスカヤ の思想の断片である。彼女はそれらを読まれるのではないかとい

つも気にして急いで書きとめていたのである。

「教育人民委員部の魂」「教育人民委員部のなかで革命前から教育学の諸課題を研究した唯一の人」「首尾一貫したマルクス主義教育学者」というタイプのクルプスカヤの性格づけは30年代の論文や演説から消えていく。その時期になると、多くの人たちは、H. K. クルプスカヤには誰も親しい身内の人間のようにには関係をもたなくなる。こうした中で、個人的に信頼をよせ、それを1929年に行ったのがH. И. プハーリンである。

「今日、ナデジダ・コンスタンチノーヴナ・クルプスカヤは、60才を迎えます。古い党員の仲間内では、お互いの会話の中で私たちはナデジダ・コンスタンチノーヴナをしばしばナージャと愛称で呼んでいました。「ナージャ、何を考えているの」「ナージャ、元気かい」というように。私たちはイリイチが彼女をそう呼んでいたように、彼女を名前前でよんでいたのです。それが私たちにはごく自然で、何の疑問もなく心からそう呼んでいたのです。このように、広大でくみつくせないほどの親密な関係の力があり、本当に深い真実の友情の偉大な感情、そして、友情に満ちた愛情、すなわち、肉親関係の感情より、また、「血縁の響き」と呼ばれるものよりもより強くはかりしれなく、より高次のタイプの感情」があったのです。」（『ブラウダ』1929年2月27日）

30年代の後半には、古い党員の大部分が、その中には上記の論文で引用した著者たちも、銃殺されるか、あるいは、多くのラーゲリに送られることになる。

真実の回想に代わって、すべてを曇らせるひとりの人物に帰着させる過去の到達にたいする嘘の偽善的な成人君子ぶった加筆が加えられていく。クルプスカヤをもう優れた教育家＝理論家とは呼ばれなくなっていた。なぜなら、創始者、全体的理論家は、ただひとりで十分だった。「全時代と諸民族の指導者」、「レーニンの思想の偉大な継承者、今日のレーニン、社会主義の全体的理論家」、一このようにマスコミを利用して国民大衆の意識と精神に浸透する目的で宣伝された一は、だれも自分と並ぶことを、それがレーニンの未亡人ですら、がまんがならなかったのである。

1924年1月に、レーニンの棺に寄り添うクルプスカヤがあった。人々は彼女の悲しみと勇氣に感動させられた。

「イリイチがついに帰らぬ人になった時のことは、すべての人が記憶している。そして、ナデジダ・コンスタンチノーヴナの姿も。ポリショイ劇場のホールには緊張した静寂が満ちていた。低いが良く聞こえるおだやかな声が深いため息のようにながれ、心臓の鼓動が止まった数千の人々を震わしていた。私たちの党は多くのことを堪え忍んできた。しかし、彼女はさらに多くのことを堪え忍ぶことになるのである」（同前）

30年代にレーニンの棺に忠誠を誓うのはスターリンだけに許され、残りの他の人々は偉大な頭領を強調するだけのわき役でしかないかのように映し出された。革命の直後にH. K. クルプスカヤは、自分の生活についての質問に「生活は幸福で、なにひとつかえたくない」と答えている。生活は沸き立っていたが、彼女は、自分の仕事を愛し、そして、彼女にとって「私的な関係においてはたいへんすばらしい生活であった。」（クルプスカヤ「10巻著作集」、第2巻、モスクワ、1957年、P.221）

晩年のクルプスカヤは、はたして、かつて自分が述べたこのような言葉を繰り返したであろうか。生活は以前と同じように沸き立っていたが、彼女の身近かな人々、友人そして信奉者たちは、周りから姿を消してしまい、一部の人たちは永遠に消えていった。彼らの運命について

は、通報者に聞かれないように辺りに気を配りながら、密かなささやき声で、彼女に話してくれるのであった。

クルプスカヤの妥協と抵抗

長年の間、H. K. クルプスカヤの仕事にたいして丹念な熟慮された選択が進められた。彼女の論文や演説は、綿密に編纂されている。アルヒーフには、当時の状況へのどんな小さな批判にも、教育学や国民教育の状態に向けられた鋭いコメントにたくさんのメモがつけられていた。レーニンの死の直後から、公表が許容されている「プロクルテスの寝台」（訳者注—強盗プロクルテスは捕らえた者を寝台に寝かせ、それより長ければ余った部分を切り落とし、短ければ引きのばした）に収まらない発言のある書物は「逮捕され」、特別の保管所に移されていた。その中の一冊『青年の教育をレーニンの精神で』は、半世紀たって印刷されたのである。（モスクワ、ペダゴギカ、1989年）

クルプスカヤの人生の神聖なる夢であったのは、社会的平等とヒューマンイズムの理想を集団的活動で確立することのできる文化的で教養のある人々の社会を創ることであった。彼女にとって30年代の工業の突進、計画経済、経営の新しい形態、これらは、革命の発展方向を前進させるエネルギーな運動にとって強力な動因であると思われた。彼女は、この任務の解決にすべてを優先させた。このために彼女は、ブハーリンとジノービエフ、カーメネフとピャタコフの有罪を他の人々と一緒に認め、妥協に走った。彼女は、ジノービエフのスターリンとの反対闘争において彼を支持することを公開で拒否した。なぜなら、「堪え忍ぶ時期には予定された計画を共同して仕事に集中する行動の最大限の統一が要求されるからである。」（『ブラウダ』1927年5月20日）

「意見の統一、行動と思想の統一だけが党を分裂から救うことが出来る。中央委員会にたいする態度において“わたしたち”と“あなたたち”に分離してはならない。中央委員会の決定は党員にとって義務である。」（『ソ連共産党中央委員会イズヴェスチヤ』1989年No.2, P.207）

30年代にH. K.クルプスカヤは、20年代に創られたものを壊滅させてしまうような党中央委員会の決定すら支持したのである。世界の有名な教育学者たちが高く評価した単一労働学校の理念を彼女が拒否したのは民主集中性の原則に従うということによってのみ説明することが出来る。（当時）ソビエトとヨーロッパの子どもたちの発達水準を比較するとソビエトの子どもが優勢であった。これは、20年代に創られた学校の有効性の重要な証明であった。20年代の学校の成果を抹消してしまう1931年9月5日の党中央委員会の決定の1カ月前に、クルプスカヤは『ブラウダ』に次のように書いている。

「ヨーロッパとわが国の子どもの8才における知識の量を比べてみよう。ヨーロッパの子どもは8才ですでに基礎的な読み書きができる。わが国の子どもはようやく勉強を始めたばかりである。入学して数年後、ヨーロッパとわが国の子どもの知識の水準を比較するなら、比較にならない。わが国の子どもたちがはるかに発達している、特に社会的知識と生物学の知識に関しては優れている。生活に知識を適応させるように学んでおり、他のタイプの知識もはるかに組織的である。わが国の子どもたちはさまざまながらくたは知らないが、しかし、彼らは、ヨーロッパの子どもたちが持っていない認識をたくさん知っている。」（クルプスカヤ、「総合技術化された学校のプログラムと方法」『ブラウダ』1931年8月3日）

H. K. クルプスカヤは、彼女の自由な思考をいらだかせ、大賛順応主義が頂点に達している条

件の中で、自己の路線を保持する努力を抑圧する「指揮官」の憎悪を年がたつごとに鋭く感じていた。階級闘争の激化についてのテーゼがスターリンによって宣言された時、階級的対応は就学前教育にまで浸透した。その時、作り出されている状況に皮肉をこめて論評を加えた国内で多分ただひとりの人は、クルプスカヤであった。学校における階級闘争とは？ 芸術におけるプロレタリアートのヘゲモニーとは？ 子どもに富農の要素とは？ 彼女は、これらの異常な語群を嘲笑し、それらを切り捨て、それらに腹をたてていた。彼女に批評をお願いし本を送ってきた著者に、H. K. クルプスカヤは、懐疑的にたずねている。

「『芸術のプロレタリアートのヘゲモニーとは？』何を意味しているのか。音楽戦線における階級闘争とは今日何に現れているのか？ 『大衆的子ども』、集団主義のための闘争とは？ アメリカのプロジェクト・メソッドは、なにゆえに弁証法的唯物論と和解しがたく矛盾するのか、余り明瞭でない。『わが国の制度では、訓育はプロジェクトの自由な選択はありえない』—この命題は、きわめて疑問である。なぜ、****〈原文で欠落〉の原理は、大衆が闘争と建設を学んでいるところでは、消滅するのか、理解できない。なぜ、学校における階級闘争が規律を低めるのか良く解らない。そのような階級闘争とはそもそもどのようなものか。」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 357, с. 4—5)

しかし、こうした彼女の抵抗は紙の上に留まり、ほんの少数の人々、彼女の信奉者たちをのぞいては、ほとんど知られなかったのである。

この時期、粛正は学校にまで襲った。学校から数百、数千のかつての僧侶、貴族、商店主、などの子どもが追放されていった。これらの子どもへの同情は厳格に処分された。かれらの社会的出身を暴露する密告や報告が積極的に奨励された。

Г. В. プレハーノフの娘をすら仕事から追放したのである。これは、H. K. クルプスカヤを憤慨させた。

「このように人々を追い払ってはいけない。たとえば、プレハーノフの娘である。彼女は、数学に関する興味深い小論文を送ってきた。そのため、私たちは、プレハーノフの長女がモスクワに住んでおり、たいへん立派な数学の教養を持った、たいへん聡明な女教師であることがわかった。しかし、彼女は、やってくるやいなや、『私は、父とは何の共通するものはない』と近親者と縁を切らなければならなかった。その後、『私は、仕事をしてないの』と話していた。このようなことで、こんなに人々を追い払ってはいけない。わが国にプレハーノフの家があり、そこに彼の妻のロザリア・マルコーブナがいるというだけではないか。それを、父のことで人間をこのように追放してはならない。」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 124, л. 5)

彼女は、「非プロレタリアートの要素」への共感、小ブルジョア思想が抜けていない、階級的構えの誤り、などの非難を恐れなかった。彼女の発言は、勇気ある市民的行為であり、当時の順応主義的資料ときわだって異なっている。

「教育人民委員部は、すべての国民教育局に学校において社会階層の特徴よる生徒のいかなる粛正をも直ちに中止することを提起する。この理由で追放されたすべてのものは、復権されなければならない。もし、両親が学校への入学に際して自分の社会的出身を隠していたとしても、彼らの刑法上の責任は問われるが、彼らの子どもは学習への権利を失わない。教育人民委員部は、人民委員部の決定が広がり、職業教育階梯や第二科学校には第一義的に労働者の子どもを受け入れなければならないとしても、しかし、市民権喪失者のすでに受け入れた子どもは平等の学習する権利を持つ。」(『プラウダ』1930年4月1日)

さまざまな社会的グループの間で、とりわけ教師の間での、H. K. クルプスカヤの人望を知って、彼女の人気を考慮して、彼女の名誉汚す試みが着手された。「上からの」シグナルがだされ、H. K. クルプスカヤへの攻撃が始められた。教育人民委員部の勤務員の集会で、彼女を疑わしい人々すなわち、かつてのエス・エルである П. П. ブロンスキー、かつての貴族である С. Т. シャツキー、社会的出身がプロレタリアートからほど遠い В. Н. シュールギン—それらの人々の理論と実践は、党の思想的方向と対立するものであった—と協調し、彼らに保護を与えたことで彼女を公式に避難した。教育人民委員部の次官であり、ソビエト学校の建設に最も重要な貢献をしてきた H. K. クルプスカヤをこともあろうに国家の生活における学校の役割の無理解と教師の役割の軽視のかどで非難したのである。これはあまりにもバカげたものであり非常識なものだったので、普段はおだやかで沈着冷静な H. K. クルプスカヤも激怒して抵抗したのであった。

「私は古い学校との闘争においてブロンスキーとも、シャツキーとも、シュールギンとも提携したのだ、ということを書いておかねばならない。ただ、それぞれ人にはその人のやり方がある。左翼的偏向が生まれたとき、あたかも戦っていないかのようなやり方もあるが、反対に、人が打のめされ、地面に横たわっている時、さらに蹴りあげるやり方もある。私は、それが事業を変革することが出来るとき、誤りに注意を呼びかけることが出来るときに闘うことを選ぶ。(ЦГА ОР, ф. 5445, ед. хр. 3, л. 68)

H. K. クルプスカヤが右翼的偏向として非難されていた С. Т. シャツキーを一右翼的偏向は、当時、党からの除名の恐れがあり、そのあとに厳しい弾圧があった—擁護した時、『夕刊モスクワ』編集集団は、1929年2月23日に催された彼女の講演に編集部名で挑戦的な解説を加えた。『夕刊モスクワ』の編集部は、同志・H. K. クルプスカヤの手紙に積極的に場所を提供しながら、マルクス主義教育学の右派の理論家としての С. Т. シャツキーの人物の評価を正す必要があるとみなしていた。こうした見解は、総合技術博物館における公開討論での中心報告者、同志・В. Н. シュールギンと公開討論で発言した一連の他の共産党員＝教育学者の状況と一致していた。当時の体制に通じた人々ですら H. K. クルプスカヤにたいする発言の厚かましさと遠慮のなさに驚かされた。

1930年、H. K. クルプスカヤの推薦にもとづく В. Н. シャツカヤ（シャツキーの妻—訳者）の共産党への加入の候補者としての資格の審査において、“反対派”への高い評価をしたことでクルプスカヤは非難された。

「親愛なるスタニスラフ！ 急いであなたに報告します。木曜日、ベラウソフで私たちを支部に受け入れてくれました。ドミトリエフが私の履歴書を読んだとき、出席者のひとりが私の出身をたずねながら、候補の取り下げを主張しました。今日、すでに入党が労働者からも制限されている時、なぜ、インテリゲンチャーを入れるのだ、というのです。予期しなかったことですが、マローゾフが私のために発言してくれました。『同志シャツカヤは、人生の20年間ものあいだ農民大衆の間での活動に献身してきた、ここでは彼女のことをみんな知っている、シャツカヤのような人たちが党に入りたいという時には、党は、喜んで受け入れるべきである。それに加え、シャツカヤには言うまでもなくすばらしい推薦書がある。同志、クルプスカヤがたとえ反対派の一員であったとしても、彼女は同志レーニンの妻であったことを考えると、彼女の推薦書を党は点検することはしないだろう』」（個人保管資料）

すべてを子どものために

H. K. クルプスカヤのあふれる母性的優しさは、子どもたちとの会見の際に発揮された。子どもたちは、彼女の精神的特質の力と高潔さを無意識のうちに感じて、彼女にあこがれた。彼らは、愛情に応えようと努め、彼女にむらがった。子どもは、彼女にとって価値の後継者であり、前途に完遂すべき新しい生活のための闘いの継続者であった。

「私は、私に子どもがないことをいつもたいへん悔やんで来ました。でも、もう悔やみません。今では、私にはたくさんの子どものがいます。コムソモールや小さなピオネールたちです。彼らは、みんなレーニン主義者であり、レーニン主義者になろうとしています。」(クルプスカヤ「10巻著作集」第1巻, P.22)

H. K. クルプスカヤにとって、若い世代との精神的交流はたいへん重要であった。子どもたちとの会見の際も彼女は新しい社会の闘争における若いピオネールの任務やコムソモールたちの社会主義建設とスタハーノフ運動への参加についてたくさんのことを語った。晩年、H. K. クルプスカヤはいろんな病気をわずらい、そのために、以前のようにしばしば人々と面会することができなかった。彼女のピオネールへの手紙は、新聞や雑誌に掲載され、宣伝的影響の資料として利用された。

「わが国では、老人はすでにみんな後方に退き、見守り、そして、あなたたちの前途にはあらゆる生活がまわっているとみなしています。あなたたちは平和な環境のもとで共産主義を建設することが出来ます。そして、さらに、その先に進ことが出来ます。……いろいろ話してきましたが、私は、もうめったに仕事場にもでかけなくなりました。体力がありません。」(ИМЛ, ф. 12, оп. 1, ед. хр. 121, С. 31, 44)

しかし、社会の生活にとって重要な問題が起こったときには、彼女は、子どものために立ち上がり、必死の闘争を行ったのである。

1937年の教育学プログラムを彼女は極反動的なものと決めつけた。なぜなら、生きた子どもが抜け落ちていたからである。

「人間の身体を知ること。年齢的特質を知ること。こうした教育学の唯物論的基礎が投げ捨てられている。環境も集団も捨てられている。(37年教育学プログラムで強調されている—訳者)意識的規律は、環境を変革することにおいて形成されるのではないか、そうでなければ意味がない。家族への言及もない。学校は、閉鎖的な機関になっている。」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. 1, ед. хр. 325, С. 1)

1937年の条件のもとで、「遺伝との闘いの方法をさがささなければならない」(同, С.18)という彼女の一言はきわめて価値のあるものであった。子どもの心理的身体健康状態における極めて重い遺伝的偏向を警告するだけでなく、教育活動において遺伝的素質や特質に依拠するために遺伝を知る必要があるという彼女の深い考えは読者の目には届かないままに残った。遺伝学者達はすでに牢獄につながれていた。スターリン的生物学を体現する“人民の学者”ルイセンコは、発生論的遺伝の思想を追放した。クルプスカヤは、当時多くの人がそうであったように異なった非科学的な考えをしていた。遺伝、環境、子どもの統一性のある研究、などのカテゴリーは、ソビエト教育学と進歩的西側の思想との結び目であると考えていたのである。

労働学校の終焉

学校での活動の好結果を H. K. クルプスカヤは、子どもの積極性、彼らの活動への参加、生活と学習への興味によるものと推定していた。「元氣な生活」「関係の陽氣なトーン」「子どもの研究的活動」など 20 年代は子どもの生活活動が特徴的であった。

学校やピオネール宮殿を訪問する際も、教師と教育者がすべてを説明し、すべてに答えた。子どもたちはスターリンにかんするうたを歌い、幸福な喜びに満ちた子ども時代を彼に感謝した。ピオネールの「呼びかけ」は、「レーニンとスターリンの事業に準備はいいか！ いつも、準備ができています！」となった。クルプスカヤは嘆きながら「子どもたちは本当には自主的に活動することが出来ず、指導者なしに問題をたてることが出来ず、彼らを引きつける質問をすることもできない。多くの学校では子どもたちはただ資料を暗記し、それを深く考えることができない」と書いている。(H. K. クルプスカヤ「6 巻選集」第 6 巻, P.376)

彼女は、教育学と学校に利欲と出世、暴力と威嚇がはびこり、訓育の仕事に欲求が意味を持たなくなり、疑わしい新機軸を教育者に強要するようになったおそろべき現象を内部から書き留めた最初の人であった。まさに党の活動を示す努力を H. K. クルプスカヤは、1930 年学校プログラムに取り入れられていた健康な考えからすると異常な事態であると説明した。そこでは、生産を一度も見たことのない子どもの教育者たちに工場の職業について話すことが提起されていた。レニングラードの生徒たちは、授業で秋と春の播種作業期間の計画を検討していた。(H. K. クルプスカヤ「文化戦線——激烈な階級闘争の戦線」『国民教育』1930 年 No.9. P.17)

これらのテーマは、シャフトウイ裁判 (1926~28 年にドンバス炭坑で爆発事故が頻発した。理由は、古い炭坑施設と革命前の技術者であった。それらを審議した一般公開の裁判のこと) のあとのプログラムに入れられた。驚いた著者たちは支配的な思想的価値に忠実であることを必死で証明するようになった。恐怖がこれまでは勇気をもって自主的に考えていた人々のところを拘束し、その参加者たちによって 1937 年に終わった悲劇となった。

無教養だけでなく、偽善そして露骨な厚顔無恥が学校生活に浸透してきた、とブロンスキーは書いている。H. K. クルプスカヤは、痛みをこめて書いている。

「授業に遅れてきたり、授業であまりよく覚えられなかったり、課題をやらない子どもたちは害をもたらす人として公表された。あるひとつの学校では、学校の中に革命裁判所を教師と生徒で組織して、そこに“巡視隊”が罪を犯した人を連行し、嚴重戒告を行い、さらに革命裁判所は退学処分までできる、という事態に達していた。(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 159, л. 8)

この方法で人々は内務人民委員部 (НКВД) 機関の指示を無条件に熱心に遂行するよう教育されたのである。

30 年代の中ごろに、学校における労働の教授を中止する決定がクルプスカヤに事前に知らせず、彼女の同意なしに採択された。当時、教育人民委員次官であった彼女は、中央委員会政治局で彼女の参加なしに準備された問題の審理を知った時、当然のこととして中央委員会の書記であるジダーノフとアンドレーエフに憤慨して訴えた。以前は、H. K. クルプスカヤの党機関の若い働き手への訴えは、高い尊敬をもって考慮され、彼女の要望はただちに満足された。1936 年 10 月は、彼女を歓迎して対応したが、それは表面的に支持を約束するものであった。H. K. クルプスカヤは、進行している活動に対する日記のメモの中で、「1936 年 10 月 5—18 日。同志、

アンドレーエフとジダーノフとの面会があった。アンドレイ・アンドレーエヴィッチは、労働の組織に関する会議を準備している。同志、ジダーノフは、今、ポリテフニズムにより大きな関心がある。」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 121, л. 29)

1937年2月に、ロシア共産党(ボ)中央委員会の扇動・宣伝局の書記局を管理するИ.Г. ローバフは、政治局で学校における労働教授についての問題が投票にかけられる、この事業を一掃することと学校のあらゆる作業所を閉鎖することが提起されている、ということを教育人民委員次官のH. K. クルプスカヤに偶然知らせた。

困惑し愕然としたクルプスカヤは、再び、中央委員会書記のジダーノフに手紙を送り、総合技術化の課題にたいするマルクスの見解を説明した。H. K. クルプスカヤは、マルクス・レーニンの教育構想において総合技術教育は特別に重要な位置を占めているという彼女を信頼して責任ある決定の採決を延期するようお願いしている。彼女は、次のように書いている。

「このような決定をしてはならない。学校には学習は必要だが労働はいらないとか、中央委員会は学校における労働の学習を廃止するというようなことをいうことは、事業を拒否する人にきっかけを与えるだけである。」(H. K. クルプスカヤ「6巻選集」第6巻, P.119)

学校における労働は廃止され、禁止された。1937年3月4日の党中央委員会の決定と教育人民委員部の命令「学校における労働の廃止について」に従って、子どもの作業所のすべての施設設備は子どもの家に移管され、教師は移管先に一緒にされた。これとまったく同じ命令が連邦共和国でも公布された。

「未曾有の成果」「ブルジョアジーにたいするソビエトの確かな優位性」が大々的に宣伝された裏で、H. K. クルプスカヤの冷静な指摘が不安と不協和をかもしだしていた。

「普通義務教育はまだ実施されていない、文盲一掃も完遂されていない、図書館事業もこのうえなく劣悪である、などなど。普通義務教育を広い範囲で実施する試み、文盲を最後まで一掃すること、等がうまくいっていない。学校の総合技術化も実現されていない。活動が窮地に陥っている。文化計画は実施されていない」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 326, л. 11)

彼女のこの種の批評は、クルプスカヤのつくりあげられた“人物像”の無菌状態と純潔を守るために削除された。

ピオネール組織は、彼女の目からみると、おそらく有益なものを学ぶ気ばらし的な組織に変質してしまっていた。H. K. クルプスカヤは、コムソモール中央委員会のピオネール課主任にたずねている。

「あまりおもしろいとはいえない労働はどうするのですか？ すべての家に家政婦がいるわけではないでしょう。床を掃除したり、暖炉に火を入れたり、食事をつくったり、菜園で働いたり、家屋の修理をしたりすることは、そんなにおもしろいものではありません。おそらくない仕事はだれか他の人がやってくれるとでもいうのでしょうか。」(H. K. クルプスカヤ「6巻選集」第6巻, P.139)

H. K. クルプスカヤは、厳しい検閲があったにもかかわらず、ピオネールの生活に権威主義、ある子どものグループを他のグループと対立させる志向を暴露した。父の特権が子どもの特権になっていた、なぜなら、彼らは、同じシステムにはいるからである。社会的公平さは、それが厳密に守られないなら社会主義の理想は終わりであるとクルプスカヤはどこへあててるわけでもなく書いている。

「子どもの組織は、特権的組織であってはならない。健康な子どもたちを別荘に連れていき、

弱くて病弱な労働者の子どもたちを埃っぽい街に残すようなことをやり、ピオネールたちをより原則に忠実で素質に恵まれ才能のある子どもたちに対する指揮権をとらせることをやり、ピオネール指導員にかれらのやりたいことをやらせ、子どもたちに第一の任務は教師を痛めつけることであるということ吹き込むことをやらせるならば、私たちは子どもを道徳的に退廃させているのである。」(ЦПА ИМЛ, ф. 12, оп. I, ед. хр. 106, л. 85)

二面性、偽善は、大人たちとピオネール組織の子どもたちの行動規範となった。

道徳的に退廃した人たちは、幸福な国における生活についての話を利用している。そこで、子どもたちは幸福な子ども時代に感謝するようなことだけを行い、現実の生活における矛盾を見ないと H. K. クルプスカヤは述べている。

「年輩者たちは、その中に両親もはいるが、恥知らずな行為をしている。酒を飲む、盗む、子どもを鞭で打つ、家政婦をののしる、子どもにウソをついたり盗んだりすることを強要する、ユダヤ人や中国人をバカにする、などである。」(H. K. クルプスカヤ「6 巻選集」第6巻, P.139)しかし、こうした生活慣行に慣れてしまったピオネールたちは、すでに、国家という機械の部品になっていた。彼らは、きわめて用心深くスパイや人民の敵を摘発し、組織の従順な巧みに小細工をする成員になっていた。

20 年代の学校と教育学は窒息させられた。指導的な雑誌『ソビエト教育学』の最も重要な任務は、多くの教育学者たちの仕事の抽象性と無内容、エセ理論の残りかすにたいする決定的なポリシエビキの批判を行うことであった。その後、人民の敵にされていく教育学者たちは、教育学の仕事を意識的に誤った道に方向づけていった。そして、П. П. Бронスキー, Л. С. Вигоцкий, С. Т. Шацкий, А. П. Пинкевич, М. М. Пистрак, М. Б. Келтеニコフなど、彼らの仕事は排除されていった

弾圧が強まるにつれて、H. K. クルプスカヤの影響は弱くなっていった。1930 年に П. П. Бронスキーは、二度目の逮捕の息子を内務人民委員部 (НКВД) から救い出す助力を彼の教え子がクルプスカヤに相談することを差し止めた。1 度目の時には、H. K. クルプスカヤは援助した。「現在では彼女はなにもできない」とBronsky はのべている。彼女にとって生活は困難になっていた。雑誌『ソビエト教育学』には、偽って、「彼女の仕事は我が党と政府にとってすぐれた長所のあるものとして評価される」と書かれていた。(1939 年 No.3, P.18)

彼女は、誠実に人生を生きたと認識して亡くなった。『教師新聞』には、クルプスカヤの棺に横たわる写真が掲載された。そこには、年老いた婦人の疲れた顔があった。彼女の最後を見送る指導者たちが彼女を取り囲んでいた。廟の演壇にたった全時代と人民の指揮官は、ある考えにふけっていた。自分の反対者に報復をしながら、彼は、ヒトラーとの共同戦略を練っていたのである。数日後、彼は、ドイツ人の愛するヒトラーのために乾杯をしたのであった。彼女の考えで作られた学校で教育を受けた世代に恐ろしい一撃が加えられる戦争がせまっていた。その世代はファシズムとの激烈な戦いで試練に耐え抜いた。そして、そのことが、クルプスカヤの人生の正当性を証明するひとつの事実となるであろう。